波間に揺れる灯籠

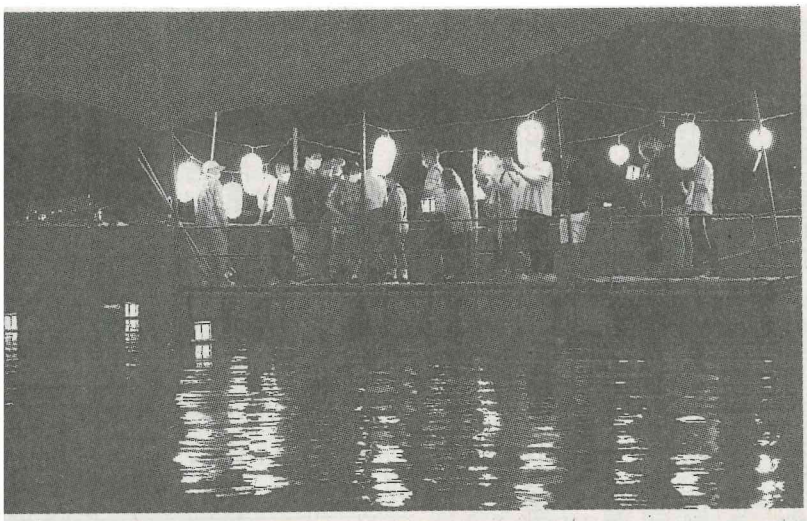
104年目の土々呂流れ灌頂

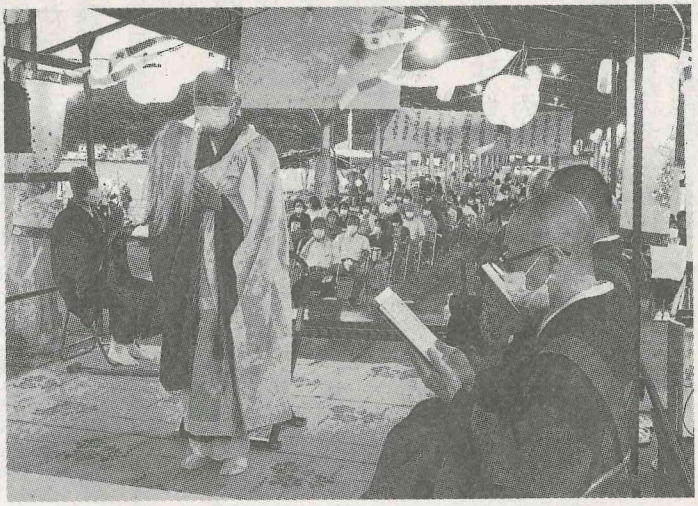
3年ぶり 初盆の家だけでなく一般も

8/17

延岡市土々呂町の盆の伝統行事「土々呂流れ灌頂（かんじょう）」が16日夜、土々呂漁港であった。昨年、一昨年は参列者を初盆家のみとし、規模縮小して実施したため、3年ぶりに一般の参列者も迎え、柔らかな灯籠の明かりが次々と海に浮かんだ。

土々呂流れ灌頂は大正時代、極楽寺（土々呂町）の11世・柳田秀明住職が町おこしとして発案し、今年で104年目を迎えた。当時の総区長や寺の世話人、地域住民の協力で発足させた「土々呂慰霊講」が毎年8月16日の一夜に実施し、先祖や初盆の霊を慰めてきた。





法要を営む柳田住職ら（同）

3年ぶりの一般参列者を迎えた行事に、開始時刻前から続々と地域の人らが来場。法要では、極楽寺の柳田泰宏住職や延岡市仏教会（野中玄雄住職）の僧侶らが読経を唱える中、100人以上が参列。手を合わせた。

土々呂慰霊講の人たちが朝早くから準備した特設の桟橋には、家族や親族を供養しようと次々に名前を書いた灯籠を手にした人が訪れ、ゆっくりと灯籠を海に浮かべると手を合わせ、ゆらゆらと海の奥へ進む灯籠を静かに見守っていた。

今年はコロナ禍前と同様の開催を目指したが、感染者数の増加を受け、協賛行事の一つ、盆踊りは直前で中止した。それでも、太鼓の演奏や抽選会、出店もあり、多くの人でにぎわった。

土々呂慰霊講の吉永清会長（87）は「従来通りにやろうと準備を進めてきました。長い間続いている行事なので、始めた方々の思いもくんで実施できました」と話した。

コロナ禍前まで毎年来ていたという佐々木希さん（49）、遥香さん（15）親子＝土々呂町＝は「8月16日は流れ灌頂として定着している。久々で懐かしい気持ちです」と喜んでいた。

延岡

周辺を彩るLED電飾

来年3月まで 愛宕山展望台に照明

延岡市

8/17

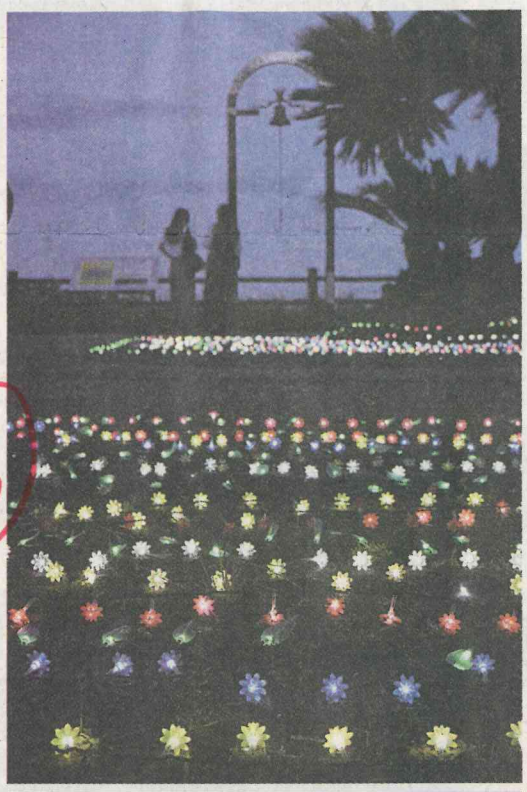
延岡市は愛宕山笠沙（かささ）の御碕（みさき）公園展望台付近にLED電飾を設置し、5日から点灯を始めた。赤、青、黄色などの明かりが夜の展望台付近を彩っている。

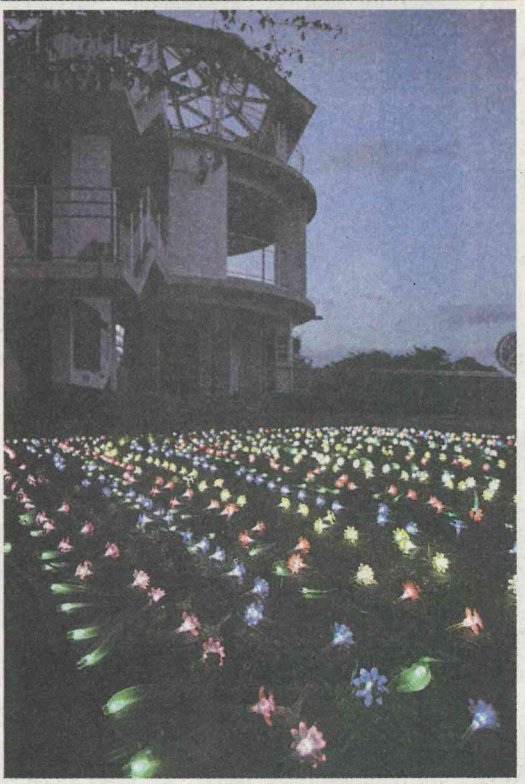
同市天神小路に9月23日、延岡城・内藤記念博物館が開館するのに合わせ、同展望台の夜間の安全対策と、まちなかの周遊促進を目的に設置。毎日、日の入りから午後10時まで点灯している。

同展望台付近では昨年9、10月、国文祭・芸文祭みやざき2020の分野別フェスティバルの一つ「神話の光アート展」が行われ、LED照明を使った光のアートが描かれた。

同展で使われたLED照明を今回、改めて使用し、展望台に通じる歩道の両脇に配置。〝お花畑〟のような電飾が夜景と相まって、訪れる人たちを楽しませている。

点灯は来年3月12日まで行われる。





愛宕山笠沙の御碕公園の展望台付近を彩るLED電飾（8日、同公園）

開催前に日常の〝モヤモヤ〟募集

9月3日 ジェンダー講演会

恋愛やジェンダーの問題を中心に執筆活動をしている清田隆之さん（恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表）のオンライン講演会が、9月3日午後1時30分から3時30分まで開かれる。県男女共同参画センター主催。

演題は「こんなところにジェンダーが!?～日常のモヤモヤ、性差の違和を探る」で、ジェンダーや無意識の偏見に気付き、自分ごととして考えられるようになることを狙いとしている。講演会に先駆けて日頃の〝モヤモヤ〟も募集している。

〝モヤモヤ〟は、例えば、「女性だから○○」と言われた、「男性のくせに○○」と言われたなど、性差にまつわる悩みや疑問など。恋愛相談も受け付けるという。

録画配信（同12日から20日まで）や録画試聴会（同10日午後2時から4時まで、同14日午前10時から正午までの2回、会場は両日とも宮崎市宮田町の県男女共同参画センター）も予定している。

申し込み、問い合わせは、同センター（☎0985・32・7591）まで。

同センターのホームページからも申し込める。

8/17

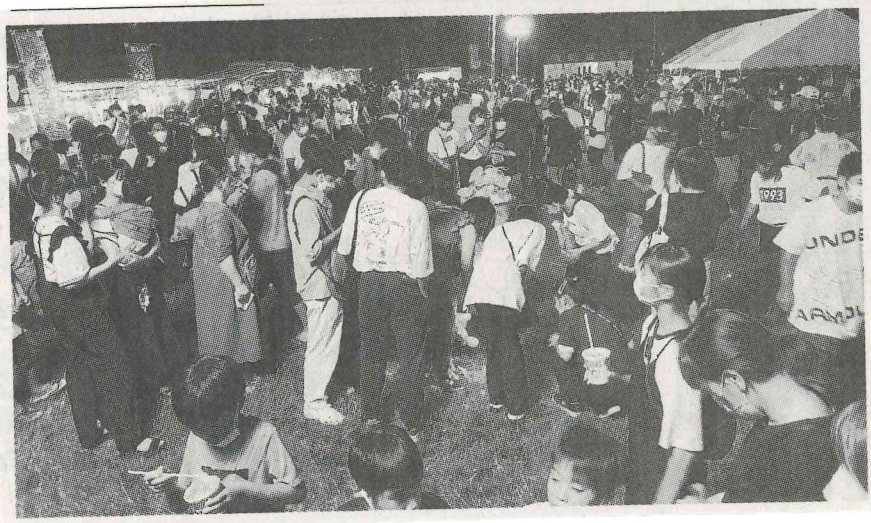
花火に歓声、出店も人気

南部地域夏まつり 縮小開催も大勢の人

延岡

延岡市の「第40回南部地域夏まつり」は13日、石田町の石田ハマボウ公園で開かれ、多くの来場者でにぎわった。主催は、延岡信用金庫一ケ岡支店友の会や延岡商工同志会士々呂・伊形支部を中心とする実行委員会（高橋忠司実行委員長）。伊福形、一ケ岡、塩浜・鶴ケ丘地区の市南部地域による恒例行事だが、一昨年と昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止。今年もカラオケ大会などのステージイベントは自粛してテーブル席も設けない縮小開催だが、業者のテントやキッチンカーが10店ほど

多くの来場者でにぎわった第40回南部地域夏まつり（石田ハマボウ公園）



8/17

記者手帳

2022・8・17

居間で祖母と孫が語り合っている。食器棚や壁いっぱいの家族写真に囲まれて祖母は戦争体験を孫に話す。ごく普通の家庭の日常会話を見ているような感覚で戦争を描くドキュメンタリーを15日の終戦記念日に見た。

▽　▽

孫は、延岡市のケーブルメディアワイワイのディレクターの甲斐帆夏さん（26）。小さいころから祖母の小並弘子さん（86）に戦争の話を聞かされてきた。近所を散歩すると延岡大空襲で亡くなった妹「ヒデちゃん」の思い出話になる。番組にしようと決めた。構想から半年、特別番組「戦争を知らない私がみた延岡大空襲」はできた。（9月11日まで放送）

▽　▽

昭和20（1945）年6月29日未明、延岡は大規模な焼夷弾攻撃を受けた。当時小学4年生の弘子さんは、6歳の妹ヒデちゃん（平方秀子さん）の手を引き、自宅近くの恒富国民学校（現恒富小）の防空壕に逃げ込んだ。その直後、「姉ちゃん、手がない」の声。見るとヒデちゃんの右腕の肘から先がなくなっている。夜明け前に息を引き取った。「ばあちゃんはどんな気持ちだったと？」。孫の質問に祖母は「悲しんでいる余裕はないし、非常事態で感情もなくなっていたのか、他人事のような感じだったね」。戦争の異様さがリアルに伝わってきた。

▽　▽

若い人たちが身近な戦争体験者から話を聞き、平和の大切さを語り継こうとしている。世代を超え、メディアの垣根も越えての連携、継続の必要性を実感した。（坂本）